明治の佐伯三青年　32

龍渓・鳴鶴・鶴谷
御手洗　一　而
（賛助会員・川越市小堤）

内閣制度の創設　2

矢野の恩師福沢を訪ねた帰国挨拶は、ヨーロッパを見て帰国した矢野の見聞から、終始社会全般にわたる文明論の話になったが、大隈との話はもっと生臭いものであった。

「おぬしの留守中、わしや河野等の離党問題はすでに耳に入っていると思うが、若い者は事を急ぎすぎる。各政党が解党する時勢に、少しは時勢を弁えねばならぬ。政党は主義主張を同じくする者の結束でなければならぬが党員拡張の余り、名簿に名前を連らねる傾向だけでは意味をなさぬ。それよりも、民心が政党離れを起している。これをくい止めねばならぬが、改革を急ぐあまり、ごたごた騒ぎが続くと、民心も飽き飽きして逆効果を招いている。おぬしでもいれば、少しは話もわかるんだがー。気勢をあげるのもよいが、心にゆとりがないのかのうー」

大隈はこう言って嘆息した。

「よくわかります。英国議会でも、一つの案件を議題にあげるのに、数年間の研究期間をおいて着実に改革を進めております。それに比べますと、日本はー」

矢野がここまで言いかけると大隈が先をとった。

「そうは言ってものう、わが国には元がないからのう。若手が急ぐのもわからぬではないが、これからの制度はやり直しがきかぬのじゃ。急いでろくなことはない。なんといっても維新後まだ二十年じゃ。国家百年の計は、もう少し腰をすえてからかからねばならぬ」

矢野は大きく頷いていた。

「板垣さんが帰国して態度を変えられたのもその事だと思われます。わが国では政治だけが先走っているように思われます。維新後政が一般大衆の身近になった事情はありますが、欧米のように政治はあくまでも生活に立脚したものでなければなりません」

「その通り。吠えるだけは誰でもできる。政府の独走に対しては吠えないよりはましだが、政治が政党のためだ

けであってはならぬのじゃ。国家再建というもっと大きな視野に立たねばならぬが、心にゆとりがないのも生活基盤が弱いからじゃ。これだけは一朝一夕というわけにはいかぬぞ。これこそ百年の大仕事じゃわい。矢野君」

大隈はこう言って白い歯を見せた。

矢野も大隈の話から同じことを考えていた。この日矢野は、大隈の話の端々から、留守中の改進党の分裂騒ぎともとれる変革を察することが出来たが、矢野にも思い当ることがあった。

自由党の解党は、板垣の帰朝後の政策の変更や、政府の弾圧もあったが、この政党の経済的な悩みは改進党も同じであった。民権運動の発展に伴って生まれた政党は運動こそ主眼で先走り、政党の資金面など経済的な地盤は全くなく、有志による寄せ金で運営されていたが、それも底をついていた。このことは民権運動家の各個人にもいえることであった。志士気取りの運動家が、口では憂国を唱えても、彼等には生活の基盤が全くなかった。大隈が心配するのもこの事であった。

改進党も結党時は、主義主張を同じくする福沢一派・大隈一派に沼間等が加わって一党を結成した。中でも沼間派は弁護士のグループとして参加し、大隈派は亡くなった小野梓に代表されるように早稲田の学校の職員が多く、矢野が代表する福沢派は報知新聞に集まった。だが新聞社の性格上報知には志士気取りの浪士がごろごろしていた。彼等には一定の収入がなく、新聞社の経営自体が思わしくなかった。矢野が頭を痛めるのもこの事であった。

新聞社の経営不振は報知社に限ったことではなかった。やはり政府の弾圧の痛手は大きかったが、民権論争の下火と時を同じくして景気も後退していった。矢野はこの時期に洋行したが、留守中犬養は朝野新聞に招かれて移り報知の経営も青息吐息であった。

こんな報知の内情報告と、矢野の慰労をかねて、藤田が矢野邸に入ったのは、矢野が帰国の挨拶をすませた数日後であった。

矢野の口からじかに聞くヨーロッパの情勢は、藤田にとっては大へんな刺戟であったが、報知の話になると二人とも顔を曇らせた。

「大隈さんも報知の経営を大へん心配されておられましたが、党のためにも機関銀行の必要性を感じ、私と牟田

口が壬午銀行を手がけるように勧められました。社の方は丁度加藤も大阪から帰りましたので人容は揃ったのですが、新聞自体に人気がなくなっている。何とかせねばとは思うが、これも時世でしょうか」

藤田は社の経営不振には名案なしといった格好であった。

「そうかもしれぬ。新聞はなくても生きられるが、米がなくては生きられぬからのう。大隈さんが大衆の生活を重視するのも当然といえばそれまでだが―。ところで銀行の方はうまくいっているのか」

「慣れぬ仕事ですが、いざという時のために集められるだけの金を集めております。何かの役には立つと思いますが―」

「そりゃ心強い。報知も何かといえば大隈さんに無心したが、いつまでも大隈さんを頼ってばかりもおられまい」

「全く。大隈さんも党の総理をひかれたことだし、社の方もこれからは独自の道を拓かねばなりませんが―」

藤田もその事はわかっていたが、名案もなく口を濁した。矢野も腕を組み暫く考えるふうで間があった。

「というて、今更尻尾を巻くわけにはいかぬわい。欧米では、皆が新聞から情報を得て時局を理解し、そこからの要求を政府に反映させる。これが本来の政治のあり方だと思う。日本の民主化がそこまでこぎつけるのは、まだまだ遠い先のことだとは思うが、新聞はそのためにも重要な役割を果さねばならぬ。社も根本的な改革が必要かもしれぬ」

矢野がここまで言うと藤田が問い返した。

「欧米の新聞事情はいかがですか」

「そのことよ。欧米では新聞がすでに大衆化して、眼や耳の役目を果している。それから印刷機一つにしても、足踏みや手廻しのような悠長なことはしておらぬ。ガスエンジンで一気に刷りあげる。すべてが合理的に出来ていて日本の新聞とは問題にならぬが、かといって、日本ではまだまだガス代よりも労働賃金の方が安いかもしれぬ。いろいろ問題はあるが組織を変えねばならぬ。これには人事もつきまとって反対もあろうと思うが、いつかは実行せねばならぬ。用紙のこと広告のこと一つずつ案を練ってみる。反対はあっても倒産するよりはましであろう。のう茂吉、その時は資金を頼むぞ」

藤田は倒産よりも改革を実行すると聞かされ、資金の

調達まで依頼されて笑い出したが、矢野の話の端々に聞かれる欧米文化の進歩の方に興味が注がれ、社の改革よりも自分の眼で欧米の事情を確めねばならぬと思った。

「それこそ銀行の金を全部もっていったらいいでしょう」

「全部か。それで社がつぶれたら一大事件になるぞ」

二人の会話は、緊張の中にも冗談がとびだし、他人事のように銀行の金を酒の肴にして笑いとばした。

この日以来、矢野は報知社改革の構想を練り始めたが藤田は夜家に帰ると机に向かって執筆に余念がなかった。藤田は矢野の洋行話にますます刺戟されていた。兄貴分の矢野が洋行によって、以前と人が違ったように視野を広めたことが話の端々に感じられ、藤田自身も洋行熱にうなされていた。藤田はさきに『文明東漸史』を著わして絶賛を浴びたが、その印税はまだ洋行の費用には足りなかった。そのため藤田は、この頃、文明史のような固い論調はさけ、読みやすい政治小説を手がけ、最後の追いこみに懸命であった。勿論矢野の『経国美談』に触発されたことはいうまでもないが、さきに藤田はシェークスピアの紹介に情熱を注いだ時から、演劇に非常な関心を示し、この年の八月には、末松謙澄が首唱する「演劇改良会」にも名を列ね、単なる論客だけではなかった。そして矢野の洋行と共に、銀行の仕事に関係すると、報知の社説からもすっかり遠去かり、好きな著述に専念するようになっていた。

年が改まって明治二十年を迎えると、矢野はいよいよかねての構想通り、報知社の改革にのり出すことにした。欧米の新聞がすでに大衆化しているのに比べて、日本の新聞がまだ特定の人々にだけしか読まれないのは、その購読料が高いためであると考えた矢野は、第一に新聞定価の引下げを決断した。当時、白米の相場が一升十銭内外であるのに、報知の購読料は一か月八十三銭で、これに郵税二十五銭を加えると、一円八銭にもなり、一か月の購読料で一斗以上の白米が買える計算になる。矢野はこの料金を大衆の手の届く廉価にしたかった。そのためには経費の節約は勿論、先ず原料紙の仕入れに注意し、あらゆる紙店との交渉を重ねたが、この時矢野は、交渉に来る紙店の事務員の中に経営の才幹にとむ一人の人物を見出し、報知に入社を要請した。この白面の一青年が「報知の大黒柱」といわれる経営手腕を発揮した三木善

八その人である。

矢野はこの三木青年に、工場主任をかねて営業・会計を補佐させる一方、社員のその場しのぎの怠惰を是正するため、奨励法をとり入れた。奨励法とは今日の部合制のことであるが、この奨励法によって、能率の効果を狙った。又紙面の方は、論説記者が勝手に無統一に執筆することを戒め、社説は矢野自らがこれに当り、箕浦や加藤には、他の報道を任せることにし、今までの探訪制度を廃し、外交員と名づけた。そして一般大衆を相手に文章を平易にし、小説等を掲載することにした。一方、今までの報知は、「御座敷新聞」「敷紙新聞」などと綽名されるほど大型で、紙面を広げれば、畳一枚位の大新聞で、もとより当時の新聞は、各社の威容を誇示するため競って大型化を計ったが、この無駄を省いて、思いきって半分程の小型にすることにした。

矢野はこれらの構想を練って、一気に購読料を三十銭に引下げ、他社のど肝をぬくとともに、大衆からは喝采を浴びた。一新した報知は、新聞界に一大旋風を巻き起こし、徐々に矢野の改革は実を結びつゝあった。更には電信のこと、広告のこと、あるいは集金の仕方等、矢野の欧米視察による改革の嵐はとどまるところを知らなかった。

藤田は、矢野のこうした日を追っての改革を、洋行の成果として刺戟されていたが、いよいよ三月になって、念願の政治小説『済民偉業録』が集成社から発刊された。

この『済民偉業録』は、矢野の『経国美談』が物語の舞台を西洋のギリシャにとったのに比し、藤田は舞台を東洋にとっている。物語は明の末期、宗粛皇帝の嘉靖年間に、揚継という骨鯁の臣がいたが、その子供の揚雲少年は、父親のすすめる科挙の制（官史登用の試験）には応ぜず、野にあって孟子の説く済民の大業を志すため、天下周遊の途につき、偉業達成のための過程を書いている。藤田は慶応を出てからすぐ報知に入り、終始野にあって、民権運動に没頭している。藤田は自分の姿を揚雲に投影させ、揚雲をしてその民権思想を代弁させている。すなわち、

「元来民ありて国あり、国ありて政治あり、政治ありて有司あるのみ、民は即ち国の本にて、之を傷ふものは取りも直さず国を傷ふものなり」

は、明らかに孟子の民権論である。矢野が少年時代の藤

田が作った漢詩によって、当時林といった藤田の才能を見出したことは前に書いたが、藤田が当時学習した『去遊民論』の

「民是国之本、本固国安、未有其本乱而末治者、云々」

や、『藤房論』の

「民之所欲、天必従之」

は、多分に東洋的民主思想、東洋的民約論的考え方で、孟子君臣論の影響が大きかった。それもその筈、藤田が師とした楠文蔚は、幕末に江戸に出て、孟子書注釈書として著名な『孟子欄外書』を著した佐藤一斉に学んでいる。藤田の血の中には、少年時代からこの時期に至るまで、一貫して孟子の説く済民という東洋の民権思想が流れていて、この『済民偉業録』を書かせたのである。明治二十年四月二十四日の郵便報知の広告には、

「鳴鶴先生夙(つと)ニ我ガ裨官小説ノ浅薄猥陋ナルヲ嘆ジ一書ヲ著ハシ其模範ヲ示スニ意アリ」

とある。

こうして藤田は、とにかく『済民偉業録』の前編上下の発行にこぎつけたが、矢野の報知を大衆化するという改革には、やはり反対も多かった。尾崎はその急先鋒の一人であった。尾崎は今更大衆におもねる必要なしとの強硬意見で、所詮報知社の経営状態まで携わる立場になかったこともあるが、藤田が銀行の仕事に関与し、著述に専心したこともあって、自らも犬養のあとを追って朝野新聞に移ることになった。

矢野はこれらの反対意見には耳を貸さなかった。欧米の新聞事情を視察した矢野は、社の立て直しという命題もあったが、新聞本来のあり方について、欧米の新聞のような報道主義をとるべきだという固い信念があった。矢野の志す改革は、単に報知の改革だけでなく、日本の新聞界を一新する画期的な試行であった。政府の度重なる弾圧によって、政党の力も衰え、言論も圧迫され、試行の時期としては恵まれていたが、この頃の政府は、長年にわたる外国との条約改正という難問題をかかえていた。外務大臣井上馨は、大臣に就任以来、外国の威嚇によって強制的に結ばれた安政条約を改正するため躍起となっていたが、再度の交渉も国際法的な手続を知らない外務省にとっては、次々に交換条件を出されて一歩も前進するところがなかった。その間井上は、鹿鳴館で大舞踏会を催したり、欧米化を急いで外国の歓心を集めるこ

とにつとめ、最終的には、領事裁判権の一部を回復する代りに、外人の判事数名を裁判所に置くこと、輸入品に対しては関税を商品により五分乃至二割五分に引上げ、輸出品に対しては五分税を課する等を明治十九年五月一日に、欧米の列国に示した。その後二十余回の交渉を重ねて、この四月にどうやら相互の意見一致を見るところまでこぎつけたが、この提案が発表されると、内外法官混合裁判制度などは、独立国の体面を傷つけるものだとして、一斉に国中の非難がわき起った。非難は世論だけではなかった。六月に欧州より帰朝した農商務大臣谷干城は、直ちに意見書を内閣に提出し、特にこの条約改正は国辱的だとして反省を促したが、容認されずと知るや、潔く官を辞して野に下り、内閣をゆるがす一大事件になった、閣内外を問わず、国論が一気に吹き上がると、伊藤は世論の暴発をおそれて、改正を一時中止することにした。政府は七月二十九日に列国の大使を招き、現在立案中の諸法律の完成するまで、条約改正の交渉は無期中止する旨宣言した。井上の長年の苦労も水泡に帰したが国内法さえも立案中だというのに、国際条約を結ぶという方がどだい無理であった。この非を悟った伊藤は、外務省内に法律取調所を設け、司法省・内務省からも顧問が集まって取調に着手することにした。

この月十六日に、藤田は長女真鶴子を授かったが、谷干城の更迭に始まり、政府の軟弱外交に悲憤慷慨する志士論客や、政党の改散以来各地に離散していた元党員も続々と帝都に集まり、再び時局は騒然としてきた。